

詩を作ってみる

岩瀬直樹さんが初めて「ウソの詩を書こう」を授業で実践したのは、20年前。多くの子どもたちは「ウソ書いていいの?」と目を輝かせて書き始めましたが、中にはなかなか筆が進まない子もいます。

そんな子どもには、風や動物になりきった工藤直子さんの詩「のはらうた」を例に出し、「これもウソの詩なんだよ」と声をかけると、黙々と書き始めたそうです。進めていくと、「ウソの詩」の中に現在その子がおかれている「本当の」気持ちが見えてくることも。

「この感覚は大人でも同じです。ただ、大人は子どものように心で感じたことを素直に表現するのが苦手。自分への期待値を下げ、とにかく書いてみることから始めてください」と岩瀬さん。

また、作った詩を「聞いてもらおう」ことも大切だそう。「人に聞いてもらい、認められることが作品を作る喜びになります。聞く人は良い点を探して伝えることを心がけて」

では、実際に「ウソの詩」を作ってみましょう。思う存分自分の内なるものを表現したら、なんとも言えない、すがすがしい気持ちが味わえますよ。

「ウソの詩」に「本当」が隠れていることも

「ウソの詩」を書こう!

詩 を作ってみる

詩は「読む」だけでなく「書く」という楽しみも。小学校の授業で「ウソの詩を書こう」を実践し、子どもたちに表現の面白さを教える小学校教諭・岩瀬直樹さんに詩の書き方を教えてもらいました。

もしも おふろに

さかながいたら

小学校3年生

もしも おふろに さかながいたら

ぼくは さかなに えさをやる

そして いっしょに およいだら

どやどや はねて あそぶのさ

(後半略)